中山道間の宿　新加納
まちづくり会かわら版

第１０号
平成２６年
１２月１５日
発　行
新加納まちづくり会
会長　小島秀俊

各務原市の平成二十六年度整備事業として
（一）中山道（市道那６９１号線）大翔～村瀬建具店は、二年がかりで整備され、完成は平成二十七年度の予定です。
（二）今尾医院東側～南旧２１号線（市道那４３０号線）は、来年三月完成の予定です。

中山道の整備（大翔～踏切交差点）
・車のスピード抑制、路肩の拡幅等により歩行者の安全対策を図る。
・歴史性・景観に配慮した整備をする。

① 車両の道路幅を５ｍとし、路肩を広くし歩行者の安全を図る。
② 道路中央の白線をなくし、車両のスピードを抑制する。
③ 全面カラー舗装をする。

中山道（６９１号線）完成イメージ

今尾医院東～旧２１号線
・車走行部分と路肩、側溝を改修。カラー舗装をし、歩行者と自転車の安全を図る。

① 東側の路肩を広くする。
② 東側路肩と西側側溝部分を着色し、歩行者の安全を図る。
③ 交差点部分は、事故防止の為、茶色舗装をする。

市道那（４３０号線等）完成イメージ

第５回 歴史講座『総集編』開催　　講師 坪内健治氏

旗本坪内氏と新加納村

平成 26 年 12 月 6 日
ふれあいセンター

歴史講座（主な内容）
一、坪内氏の出自、系図
二、木曽川の変遷（川並衆）
三、織田信長との関係
四、木下藤吉郎（秀吉）との関係
五、徳川家康との関係
・関ヶ原の戦い（鉄砲隊）
・旗本坪内氏の成立
六、旗本坪内氏の領地支配
七、本家（新加納）と内分三家（前渡・三井・平島）の対立
八、尾張藩主より前渡・平島坪内家への書状について
九、幕末・明治維新
十、総集編
＊江戸時代、新加納に陣屋を置いた旗本坪内氏の歴史を詳しく学ぶことができ、大変参考になりました。（感謝）

中山道探訪

苗木城跡・中津川宿・馬籠宿を見学
十月二十八日（火）好天に恵まれ会員二十三人が参加。中山道、東濃の三宿場を見学しました。
苗木城跡（遠山資料館）そして、中津川宿の（歴史資料館）馬籠宿の散策と（藤村記念館）落合宿など訪ねました。
江戸の資料を整理展示、又景観の保全がされ、そして今も残る、江戸の町並みを堪能しました。

落合宿

中津川宿

苗木城跡・（遠山資料館）

藤村記念館

馬籠宿

～読みきり～

新加納立場地区

まめ歴史事典

新加納の戦い　戦国時代　永禄四(1561)年

美濃斎藤「軍師、竹中半兵衛重治」と尾張信長「木下藤吉郎秀吉」が虚々実々の戦いを展開…。信長は、難を逃れ一目散に尾張へ引きあげた。自然の要塞である木曽川の大河と新加納台地は、難攻不落でした。

弘治二（一五五六）年四月
斎藤道三は子義竜との戦いに敗れ、長良川原で戦死。前日の遺言状には「美濃国は信長に譲り渡す。」と記。

永禄四（一五六一）年七月
信長は、木曽川を越え美濃国加賀見野（各務野）に兵を出された。
敵も井之口（岐阜）から斎藤軍が兵を出して、新加納村に配置した。

竹中氏陣屋跡　「県指定史跡」垂井町

竹中半兵衛は、戦いの後、山中に隠れ住んでいた。その後、秀吉の熱心なすすめにより、秀吉の軍師となり智謀を発揮した。

その間、馬のかけ引きもできない難所のため信長公はその日はご帰陣された。
以降、幾度も美濃進撃をするも失敗に終ります。
若い信長にとって不名誉な敗戦であり、信長記等には簡単に記しています。（詳細不明。）

「絵本太閤記」では、次の内容で興味深く掲載されています。
～那加町史より～

信長はいかにしても稲葉山城を葬るべきであると決心し、全兵力二万騎を集め、木曽川の河田を渡って美濃へ侵入します。
早くもこの挙兵を知った美濃菩提山城主、竹中半兵衛は、斎藤家浮沈の時と考え多年の恩義に報いるため、馬を稲葉城下に急がせ、彼独特の作戦計画を立てます。
信長方の第一陣は柴田勝家、第二陣は池田信輝第三陣は丹羽長秀、第四陣は信長本体の順序で、新加納・芋島・長森を経て稲葉山へ向って進軍して来ます。
これを迎えた美濃勢は信長軍に抵抗し切れないように見せかけ、一歩一歩後退し始めます。
信長軍は図に乗り、一挙に稲葉山へ迫ろうとして猛烈に前進しますが、敵を充分に引き入れたと判断した竹中半兵衛は「戦機到来せり」と全軍に反撃命令を下します。
「時や遅し」と待ちかまえていた一万余の美濃勢は、喚声をあげて一斉に織田軍へ突入したため、織田軍は各陣とも寸断され、前へも後へも動けぬ窮地に陥ってしまいます。
織田の一・二・三陣および本陣は共に散々に敗れ、各陣の連絡はとだえ、戦死者は続出。
信長本陣も美濃の猛将日根野備中兄弟に攻めたてられて後退することも不可能となり、全滅寸前という状況になります。
しかし、この日殿軍を承り五色の吹流しを打ちたて、はるか後方に控えていた木下藤吉郎秀吉の陣容は、前線の混乱に引き換えて微動だにしません。
「信長本陣危し、速に救援せよ。」と叫びながら、伝騎梁田出羽守が木下軍の下に飛んで来ますと、秀吉は床几にかけて軍扇をあおぎながら「やがて参るであろう。」と答えます。
梁田は怒って「やがてではない。即刻だぞ。」とどなって帰ってゆきます。
続いてまた伝騎が来ますが、秀吉の回答は前と同じです。
やがて、各務原に暮色が迫ろうとした頃、木下軍から錦旗が空高くあげられ、大きく左右に振られますが、それに応じて突然、稲葉山一帯から松明の火が点々と輝き初め、その数は数百を下らないかに見られます。
これは秀吉がこのことを予期して、尾張の百姓を狩り出し、稲葉山の背後にかくしておいたものです。
稲葉山城を全くの空城として出撃した美濃勢は、「すわ一大事」とばかり包囲陣をといて城へ引きあげ始めますので、半兵衛は声をからして「虚報である。ふみ止まれ。」と停止を命じますが、彼の命令は美濃勢に徹底しません。
残念にも半兵衛は信長を討ちもらしてしまいます。この時、日根野備中に追いつめられた信長は、一目散に尾張へ引きあげていったと伝えられています。（参考文献　那加町史）

＊「絵本太閤記」は、公の歴史書ではありませんが、虚々実々で妙味極まる物語です。大変参考になりますので掲載しました。
尚、江戸幕府（元禄時代一七七〇年頃）は秀吉の本を「発売禁止」にしました！